

2月2日（月）

おはようございます。

今日は少しとりとめない話になるかも知れませんが、土曜日の夜にテレビを見ていたら、中井貴一という役者さんと、コピーライターの糸井重里さんが話をしていました。聞いていて話がおもしろかったので、諸君の参考になるだろうと思いました。

最初は時代劇の話でした。キセルの持ち方ひとつでも、武士のキセルの持ち方と、町人のキセルの持ち方が違うという話を取りあげて、こういった伝統は大切に継承していかないと分からなくなるという話をしていました。この話も心に残りましたが、それから先の話が大変面白いと思いました。

一つは、歳をとったら涙もろくなると誰もがよく言うけれども、それは違うという話です。涙もろくなったのは、歳をとったからではなく、経験をたくさん積んだからだと言うべきだということです。さまざまに経験を積んだから、想像力が増していろいろなことをリアルに想像できるようになって、涙もろくなったのだ。単に歳を取ったからではなく、経験を積んで、人の気持ちをわりあい思い描くことができるようになったからこそ、涙もろくなるということだと。なるほどそうかと思いました。

もう一つは、中井貴一のお父さんも俳優で佐田啓二という人大変男前な役者さんの話です。あるときキネマ旬報という映画の祭典で、佐田啓二さんが主演男優賞を取ったという。その彼に、次の目標はなんですかとインタビューで聞いたら彼は、助演男優賞を取ることだと、答えたという。

そして、家へ帰ってきたら、中井貴一のお母さんつまり佐田啓二の奥さんが、あなたは、次の目標は助演男優賞だと話しましたが、そんないやらしいこと言っではいけません。次も主演男優賞を続けてもらいたいぐらいのことを言わないと、聞いた人はきつといやらしい人だと思いますよ、と言った。

そうしたら佐田啓二が奥さんに、「おまえさんは勘違いをしているし、何もわかっていない。主演男優賞という賞を取るのはそんなに難しくない。監督がよくて、周りがよかったら、ほっといてもとれる。そういうものなのだ。ところが助演男優賞をもらうというのは、大変難しい。なぜかと言うと、たとえば、人通りのあるところで、二人でケンカをする芝居があると。この二人がくさい芝居をしているなと思っていても、エキストラの人たちが、歩く芝居をとても自然に演技していると、本物がほんまにケンカをしているように見えてくる、そういうものなのだからだ」と言った。

つまり、助演男優というものは、この周りにいる役者さんなのだ。この仕事は、主役をどれだけ輝かすことができるかが、自分にかかっているということをよく分かっている人たちだ。つまりこの賞は、見事に主役を輝かすこと

ができました、といってもらえる賞だ。だから、簡単にもらえるような賞ではなく大変難しいものなのだと聞いたと聞いて、中井貴一は、すごく勉強になったと言っていた。

僕は、この問題はただ、芝居のことだけでなく、クラスやチームやクラブや仕事やすべてに関わることだなと思って感心したのです。これを諸君が参考にしてくれたら、いいと思ったのです。

たとえばクラスのことでも、あるいはクラブのことでも、委員長やキャプテンといった人を輝かすのは周りにいる人たちですが、周りで彼らを輝かす役柄を上手に努めることが一番難しいということなのです。

この話を是非参考にしていただいて、主役をさせてもらっている人は、周りが自分を盛り立てて、主役をさせてもらっているのだなと、わからなくてはいけませんし、盛り立てている側は盛り立てている側で、自分らによってこの主役は輝いていくのだなと分かることが大切なのです。

クラスやクラブのことで、参考になるようでしたら是非参考にして欲しいと思います。

今朝の話はこれで終わります。

(学校長)